

『失樂園』における「第一質料」について

道家弘一郎

天使ラファエルはアダムの求めに応じて、天地の由来を次のように説く。

アダムよ、唯一人の全能なる神がこの世に在し給い、すべてはその神から生じ、また善より逸脱しない限り再び神へともどってゆく、——すべてはもともと完全に善きものとして創造されたものであるからだ。すべては一つの原質料から出来ており、様々な形相かたち、様々な段階をもつ内質、そして生けるものの場合には様々な段階の生命、をそれぞれ与えられている。(平井正穂訳)

O Adam, one Almighty is, from whom

All things proceed, and up to him return,

If not depraved from good, created all

Such to perfection, one first matter all,

Endued with various forms, various degrees

Of substance, and, in things that live, of life; . . .

P.L. V 469-474

さらに天使ラファエルの話は、七日間にわたる天地創造の経緯にもおよぶ。御子は父の命をうけ、「神の永遠の庫のなかに用意されていた黄金の両脚器コンパスを手にとり、この宇宙とすべての被造物の限界を定めた。一方の脚を中心に置き、他方の脚を広漠として暗澹たる深淵のなかにぐるりと一回転させ、「ここまで拡がるがよい、ここまでがお前の領分だ、これがお前の正しい境界線だ、おお、世界よ！」と宣言された」。

in his hand

He took the golden compasses, prepared

In God's eternal store, to circumscribe

This Universe, and all created things.

One foot he centred, and the other turned

Round through the vast profoundly obscure,

And said, "Thus far extend, thus far thy bounds;

This be thy just circumference, O world!"

天使ラファエルはいう、「こうして神は天を造り、こうして地を造り給うたが、まだ形もなく、空々漠々たるものであった」。

Thus God the Heaven created, thus the Earth,

Matter unformed and void.

P.L. VII 232-233

これら第五・第七巻からの引用で分かることは、‘one first matter’は‘unformed and void’であることである。だが、この first matter はまさに、アリストテレスの「第一質料」ではないか。因みに『哲学事典』（平凡社、一九八五）を見ると、「第一質料」の項に、こうある。

質料は事物を構成する素材、材料を意味するが、現実中存在する素材は、なおなんらかの形相によって限定され、一定の性質、量をもっている。これにたいし、そのようないっさいの限定をとりさった究極に考えられる、木材とも金属とも重いとも軽いともいわれない純粹の素材そのもの（それは現実には存在せずただ思考においてのみ存在する）を第一質料という。アリストテレスにおいては生成消滅変化などの現象は、事物の根底にあるこの第一質料が一つの形相を失って他の形相をうけいれたものと考えられる。普通の現実中存在する質

料を第二質料という場合がある。(884ページ)

岩田靖夫『西洋思想の源流』(放送大学教育振興会、一九九七)には、「だから、質料概念を究極まで考えつめたアリストテレスは、それを、感覚的に見ることも触れることもできないもの、語ることも想像することもできないもの、つまり認識内容としては無であるところの「かのもの」、ただ理論的に措定せらるべき暗黒の基体、と語ったのである」という。(173ページ)

溯って、かの波多野精一『西洋哲学史要』(全集第一巻、岩波、初版は明治34年)に次の一節がある。

形質の關係を凡ての事物に適用せば、事物は最下の者より最上に及ぶ階段に排列せらるべし。最下級は、其以下に何者もなき故、形相たることなく、従て純粹の質料たるべし。是アリストテレスが「第一質料」と名づくる者なり。即ち所謂物質に外ならず。物質は、純粹の質料として、何にても(水にても草にても石にても)あり得る者なれど、形相無きが故に其自身にては(水でも草でも石でもなきたゞの物質は)存在するを得ず。實際は何等かの形相を享受して存在する者なり。次に最上段は何ぞといふに、其以上に何者もなければ質料たることなく、従て純粹の形相たるべし。是をアリストテレスは神と名づけたり。(61ページ)

神については次のページに注記のごとく、小さい活字で、次のように記している。

アリストテレスの神はプラトーンのイデアの特性を悉く有する者なり。非物質的にして而も物質界の運動の原因たり。世界よりは超越的にして而も世界の目的たり。只異なるはアリストテレスの神は非物質的たるに止らで又精神的たるにあり。されど人格的とは称すべからず。意思を有せざればなり。(62ページ)

パスカルのいう「哲学者の神」であって、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」ではないのである。
『メモリアル』一六五四・十一・二三、使徒行伝七³²)

立返って『失樂園』第五卷473行の本文には、'Endued with various forms' とある。endue は「与える、着せる」の意味に用いられるが、衣の裾から覗いている原義はラテン語の *inducere* 「導き入れる」= *induce*」である。いわば第一質料が様々な形のなかに導入されて自然的存在物のすべてが実現していくのである。

福田歓一『政治学史』（東大出版会、一九八四）には、こうある。

アリストテレスは、存在の全体を包括するような一つの図式を作りあげた……要するに、世界は、質料から形相への不断の生成発展である……具体的なものが、その未だ規定されない素材から発展していく、つまり、素材はその中にやがて形相を実現し……一方形相は、その素材を規定し、定着する。……そして最後にいかなる質料とも結びつかない形相の中の形相、すべてを実現した形相としての神に到達する。……世界は底辺にあ

る無機物から頂点にある神に向って動いていく秩序として段階をなすものとされる。……この神は、いわば一つの概念、第一の形相 *proton eidos* : *forma prima* であつて、このような神は、おおよそ、宗教や神話に出てくるような、人間臭いなまなましい神ではない。それこそすべての存在を包括する最高の概念、まさに、哲学者の神にほかならない。それは、質料が完全に実現された純粋な形相であり、永遠の実体、かつエネルギーであり、全存在の最高の目的であり、万物の愛と思考の対象、自己以外に対象をもたぬ絶対者にほかならない。すなわち神は、他を動かすことはあつても自分は動かされることはないのである、しかし、それは結局、哲学者が頭の中で考え出した概念であると言えよう。(38—39ページ)

ところで、創世記第一章第一節には、「はじめに神は天と地とを創造された」とある。この天と地とは何を意味するか。矢内原忠雄の注解が最も簡明・的確なので、次に引用する。

「天地を」とあるは、三節以下にその創造の叙述せられる天地を指すのであるか、或ひはそれよりも広き範圍の天地を言ふものであるか。三節以下に挙げられる被造物は必ずしも網羅的と言ふを得ず、また水は創造の前段階たる原始状態に於いて既に存在している。天使も亦神と永遠の存在を共にせざるものであるから、目に見ゆる物質的世界の創造と共に、或ひはそれ以前に創造られたものでなければならぬ(ヨブ記三八の七参照)。これらの理由によつて一節の「天」は靈的な天、即ち天使を意味し、「地」は物質的な天地を包含する、と

解釈する者もある。思ふに神が唯一の創造者であり、神以外の一切の存在が被造物であることの論理的結果として、この種の広義の解釈を試むことは信仰上有益たるを失はないが、併し創世記者としては単純に、以下述ぶる創造の御業の総括を冒頭に掲げたものであらう。(『矢内原忠雄全集第十卷「創世記」』、19ページ)

「地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた」(創一2)

欽定訳も *The New English Bible* の ‘without form, and void’ である。手許の独訳、仏訳、ウルガタ(ラテン語訳)、七十人訳(ギリシア語)も、ほぼ、これに近い二語を用いている。「形なく」と訳された原語「トーフー」は、荒廃、空虚、無形体という意味の名詞であり、「むなしく」の原語「ボーフー」は、鈍重、無意識、無生命を意味する名詞である。矢内原や黒崎幸吉(『旧約聖書略註上』)が、この原語を引くのは、「トーフー・ワー・ボーフー」という、この一対の語の響きといい意味といい、共に言いしれぬ凄み、恐怖を感じさせるからである。これを一言にすれば「渾沌」である、と矢内原はその注解にいう。(『全集一〇23』) 因みに、この二語が、新共同訳と関根正雄訳では「混沌」、月本昭男訳では「空漠」、という一語に訳されている。

「淵」は、欽定訳では ‘the deep’ と訳されているが、原語は「テホーム」で「原始の海」(関根)とも「混沌の海」(月本)とも訳される。「テホーム」とは「原始の大海とか、混沌とした何かドロドロした素材で」あり、ヨ

ローロッパの伝統的な解釈では、ギリシア的な「質料」に置き換えられる、という。(『関根正雄著作集十三「創世時代講解」15ページ)

ところで本稿冒頭で引用した『失樂園』第五巻における「万物は神から生じ、神に帰ってゆく」(5469-470)という一節の万物のなかには天使も入っている。というのは、ここに描かれる進化の「階梯 (scale; V 483)」の最上段には天使が位置し、人間もいつかは浄化されて天使となりうる、というのだから。ミルトンは、天使も「one first matter (V 472)」から造られ、質料をもっている、と考えていた。こうして創世記第一章第一節の「天」は、霊的な天、天使を意味するものとなる。

アウグスティヌスはその『創世記逐語注解』において、天と地に対する考えを三通りに分類している(『アウグスティヌス著作集16 創世記注解(1)』、10ページ、教文館)。

(一) 天地ともに物的な被造物が意味される場合。つまり、現代の科学が研究の対象とするような宇宙や微粒子を含めて、「いと高きところのものであれ、深きところのものであれ、すべて物的な被造物が意味される」。矢内原忠雄の『創世記』は、この種類に入る。

(二) 「天と地ということで、霊的、物的被造物両者の無形相的質料が語られている」と見なす場合。霊的被

造物も、創造者に身を向けてこそ形相づけられ、完成されるが、身を向けないなら無形相のままである。それゆえ、それ自身のうちにおいてありうるごときもの、すなわち靈的被造物の無形相的質料であり、一方、物体的被造物もあらゆる物体的性質を欠いているが、なお、物体的なものとして理解されうるとすれば、それがこの場合である。

(三) 「天とは、それが造られた初めから完成され、常に至福状態にある靈的被造物のことであり、地とはこれに対して、未だ完成していない物体的質料のことである」。

次に第2節の「地は形なく、むなしく」という言葉で、「物体の無形相性」が示され、「闇が深淵の面にあつた」という言葉で、「靈的存在の無形相性」が示されている、という。

闇におおわれた深淵という言葉で、創造者に身を向けない場合の生の無形相的本性を考えるのである。靈的被造物はこのように身を向けることよつてのみ、形成され、深淵でなくなり、照らされて闇でなくなるのである。では「闇が深淵の面にあつた」となぜ言われているのか。あるいは光がなかったからか。もし光があれば、いずれにしても深淵の上にあるはずであり、いわば深淵一面に広がっているはずである。この光は、靈的被造物が、不変で非物体的な光、つまり神に身を向ける時に、靈的被造物のうちに生じるのである。(11ページ)

ここに掲げた三つの解釈のうち、第三の解釈は『告白』第十二巻において彼が示していた解釈である。そこでは天とは、いわゆる「天の天」、初めより形相づけられたものとしての靈的被造物を表わし、地が無形相的質料を表わすものであった(一二・二・二一八・八)。これに対し、本書『逐語注解』では第二の解釈が『告白』の解釈を修正して提出されている。ここでは、物体的なもののみならず靈的なものにも無形相的質料が認められ、天とは靈的被造物の、地とは物体的被造物の、それぞれの無形相的質料 (*materia informis*) を指すとされる。(『アウグスティヌス著作集16』365ページ参照) 第一質料という用語こそ使わないが、「無形相的質料」とは即ち第一質料のことであると考えられる。

アウグスティヌスと同じようにトマス・アキナスは『神学大全』の第五十問題において、物体的被造物と靈的被造物とを区別し、それぞれについて考察した後、第六一問題第四項において次のようにいう。

物体的な被造物と靈的な被造物とが相俟って、そこから一つの宇宙が構成される……されば、靈的な被造物は、物体的な被造物に対して何らかの秩序づけを持ち、物体的な被造物全体を統轄するという、そうした仕方において創造されたのである。だからして天使が、物体的な本性のもの *naturae corporeae* 全体の統轄者として、最高の物体 *copus supremum* において創造されたことは適切だったのであり、その際この物体が淨火天と称せられようと、他のいかなる名でもって呼ばれようとも、それは問うところではない——。イシドルスが『申命

記』第十章(第十
四節)の『天も、天の天も、すべて汝の神たる主のものである。』ということばに註して、最高の天が天使たちの天なのであると述べている所以もここに存している。(『神学大全』第四冊、331ページ、創文社)

ミルトンの『ラムス論理学提要』のなかにも「質料」と「形相」の項目がある。が、その前に「作動因」の項目があり、「質料」「形相」と続いて、その後「目的」の項目がある。そして、これら四つとも「原因」として説かれている。

質料は作動因に続くもので、作動因の結果の一種である。作動因は、質料をして形相をすぐに受けいれられるように準備するからである。作動因が先ず初めに動かすものであり、質料はそれに応じて初めに動かされるものであるから、作動因は能動的原理、質料は受動的原理といわれる。この質料の定義は、すべての著述家の間にほとんども共通である。質料のせいで、一つの結果が起るのであるから、質料は原因である、と定義される。

(Yale Milton, VIII 230, Columbia Milton, XI 50-53)

私にとって興味ぶかいのは、それに続く次の記述である。

それゆえ質料は、あらゆる存在物、あらゆる非存在物にも共通である。可感的・具体的なものにだけ特有な

のではない。それがどんな種類のものでも、その質料がなければならぬ、すなわち、可感的なものには可感的質料が、永遠的なものには永遠的質料が存在しなければならぬ。

これは天使には天使的質料がある、ということであり、アウグスティヌスの『創世記逐語詳解』とも一致する。

『神学大全』のなかには、「神は霊である。……神は絶対に物体 *corpus* ではない。……それゆえ神は質料と形相との複合を含むものではありえない。……神が質料を有するという帰結は生じない」とある。(152―57、創文社)

Juliet Lucy Cummins, 'Milton's Gods and the Matter of Creation,' in *Milton Studies* 40 (2001) は、鋭利な論旨に感心するが、あまりに「性」に偏りすぎた解釈に違和感がある。それに神と第一質料とを同列・同格におき、創造をあたかも男女二神、父と第一質料の交合のごとく見なしている。ミルトンの『教義論』には、「神は、あらゆるものの第一の、絶対的な、唯一の原因であるから、いうまでもなく、すべての原因を彼自身のなかに包含する。それゆえ質料因も神のものでなければならぬ」とある。「動かすもの」たる質料因は、神に属するが、しかし「質料」そのものは、神から造られた被造物である。ミルトン自身も、質料と質料因とを混同してはいない。

(Yale Milton, VI 307-309, *Columbia Milton*, XV 20-23) 『神学大全』は第一質料と神とを混同することの誤りを繰返し指摘している。「第一質料は、現実態における有ではなく単に可能態における有たるにすぎないゆえに、それ自身独立的なものとして実在しているわけではない。」(1132) それゆえ、存在そのものたる神と同一視、あるいは

は同列視しすることは、「最も愚劣な説」(175)である、とアキイナスはいう。

ここで『失樂園』第五巻の、最初の引用にもどる。「すべてのものは、神から出て、神に戻る(547)」という言葉は、ロマ書の「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっている(11-36)」ということばにそっくりである。

すべてのものは、第一質料から成り、様々な形相を与えられて、千差万別、千紫万紅の自然界を織り成す。個物はおのおのその個性を発揮し、発展して開花し結実する。ここで果実は食物として人間に食べられ、人間を養う。運動は人間を介して肉体から精神へと上昇し、天使を経て、神へと近づく。この自然の階梯を昇ることによって、人間自身も浄化されて天使となることができる、という。(549-505)

この一節で私が注目するのは、天使も第一質料から成る、天使は第一質料の発展の最高段階である、ということである。そして、もう一つは、質料が形相を与えられるという箇所で、'Endued (V 473)'という動詞が用いられていたことである。endueには先にも述べたように「授ける」と同時に「着せる」という意味がある。質料が形相に「手を通す」というイメージが何とも微笑ましい。

『失樂園』第七巻には次の二行がある。

Thus God the Heaven created, thus the Earth,

天も地も共に「形なく空しき質料」である、としている。その点では第五卷469行以下と同じである。この二行がそういうふうに使われることは、J. Richardson, *Explanatory Notes and Remarks on Milton's Paradise Lost* (1734) のような古い注解にも見える。しかし聖書では、地だけが「形なく空しく」とされていた。また『失樂園』第七卷の「天」は、天使の住む天上界・淨火天のことではない。アウグスティヌスやアキナスの用語を用いれば、物的被造物としての天である。第七卷の、この場合は、セイタンが追放され、天上界にできた空白を満たすため人間を創造する目的で、御子が父なる神の依頼をうけて天地の創造に乗りだすのであるから、天上界は既に存在する。それゆえ第七卷の天は、天上界や天使という靈的被造物を指すのではない。創世記記者の意図に近い。(矢内原『創世記』)

to circumscribe

This Universe, and all created things,

VII 226-227

この 'circumscribe' (限界を定める) という言葉に注意したい。『神学大全』第五十二問題「天使の場所に対する関連について」、第二項に次のような記述があるからである。(4 169-170)

場所においてあるということが、物体と天使と神とでは、その適合する仕方がそれぞれ異なっている……物体が場所においてあるのは、画域的 *circumscriptive* な仕方においてである。(物体は場所と尺度を同じくするものなるがゆえに——)。だが、天使の場合は画域的な仕方においてではなく(天使は場所と尺度を同じくするものではないがゆえに)、限定的 *definitive* な仕方においてなのである。(或る一つの場所においてであり、他の場所においてはあらぬがゆえに——)。神の場合は、これに対して、画域的な仕方においてでもなければ、限定的な仕方においてでもないのである。(神はどこにも存在しているのであるから——)。

‘*circumscribe*’を画域とは旨く言ったものである。これによっても第七巻の天は、物体的被造物としての天であって、第五巻の、天使や天上界という靈的被造物としての天ではない。物体的被造物として「地」の方に分類されていた可感的宇宙である。

もう一箇所、*circumscribe* が使われたのは第五巻825行、天使アブデエルが、反乱を企てるセイタンを戒める科白のなかにある。

Shalt thou give law to God? shalt thou dispute
With Him the points of liberty, who made

Thee what thou art, and formed the powers of Heaven

Such as he pleased, and circumscribed their being?

V 822-825

いま在るがごとくに天使を造り、御心の望むがままに天使の在り方に「一定の限界を定めた」神と、自由の問題について論争しようというのか？ と迫る。ここは先の例とは違って、「限界を設ける」「制限する」という意味で、天使を対象に用いている。したがってミルトンは、‘circumscribe’なる語を物的被造物に対してのみ用いているわけではない。

因みに OED には ‘definitive’ の語義として、

+ 3. *Metaph.* Having a definite position, but not occupying space : opposed to *circumscriptive*. *Obs.*

とあり、ホップズの文章が引用されているが、その意味は、なんと「このような区別は畏にすぎない」という（一六五七）。そして最後の引例は一六六五年、グランヴィルの文章である。したがってミルトンが、‘circumscribe’を天使に適用しても、不都合は感じなかったであろう。まして第七巻の場合とは違う意味で用いている。それにして OED のこの語釈は、『神学大全』の記述と完全に一致する。

また第七巻 170—171 行、

I, uncircumscribed, myself retire,
And put not forth my goodness, . . .

という神の言葉は、ミルトン特有の「撤退による創造」を神自身が宣言した箇所で、まさに空間的な意味で「画域」されないものだとということを語っている。

創世記には「闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を覆っていた」(一・二)とあるのを、ミルトンは次のように敷衍する。

Darkness profound

VII 233

Covered th' abyss ; but on the wat'ry calm

His brooding wings the Spirit of God outspread,

235

And vital virtue infused, and vital warmth,

Throughout the fluid mass, but downward purged

The black, tartareous, cold, infernal dregs,

Adverse to life ; then founded, then conglobed

Like things to like, the rest to several place

240

Disparted, and between spun out the air,

And Earth, self-balanced, on her centre hung.

深い闇が

七
233

深淵を覆っていた。しかし、その静かな水面の上に
神の霊が、万物を育む彼の翼を拡げていた。

235

そして生命の力と、生命の熱を、流れ動く大きな塊の
すみずみまで滲み込ませた。が、一方、生命に逆らう
黒く、暗く、冷たい、地獄の滓のようなものは、

下の方へと追いやった。次に、似たものは似たものと

一緒に集めて固め球状にし、余ったものは、それぞれの場所へと

240

分散させた。そして、その中間には空気を吹きこみ

地球を、自力で平衡をとらせ、その中心に懸けた。

『失樂園』において御子が創造したものは物体的被造物だけではない。霊的被造物もまた御子の創造による。

セイタンが謀叛を企てたとき、アブディエルは翻意を促している。「全能の神は、その御言葉によるが如く、実にあの御子によって、すべてのものを、汝さえも造り給うたのだ。天上にある天使はすべて、御子によって造られ、それぞれの輝かしい階級につけ、栄光の冠を与えられ、その栄光にふさわしい座天使、主天使、権天使、力天使、能天使と、おのおの本質にふさわしい名称を賜ったのだ」と。

by whom (i. e. the Son)

As by his Word, the mighty Father made

All things, even thee, and all the Spirits of Heaven

By him created in their bright degrees,

Crowned them with glory, and to their glory named

Thrones, Dominations, Princedoms, Virtues, Powers,

Essential Powers ; . . .

V 835-841

セイタンはますます反発して言う、「なに、われわれが造られた者だと、お前は言うのか？ しかも父からその子へ委譲された仕事で二番手の作だ、と。なんとも奇怪斬新なる意見！ そんな教義をどこから学んできたか、知りたいものだ！」

That we were formed, then, say'st thou? and the work

Of secondary hands, by task transferred

From Father to his Son? Strange point and new!

Doctrine which we would know whence learned!

V 853-856

出典はもとより聖書にある。最新の岩波版より引用する。

はじめに、ことばがいた。

ことばは、神のもとにいた。

ことばは、神であった。

この方は、はじめに神のもとにいた。

すべてのことは、彼を介して生じた。

彼をさしおいては、なに一つ生じなかった。

ヨハネ一 1-3 小林稔訳

この方は見えざる神の形姿。

あらゆる創造の「内で」最初の誕生者。

事実、御子において万物が創造された。

天にあるものも地の上にあるものも、

見えるものも見えざるものも、

王座であれ主権であれ、

支配であれ権勢であれ。

万物は御子を通して、そして御子に向けて創造されている。

また御子は万物に先立ち、

万物は御子において存立している。

コロサイ一15―17 保坂高殿訳

「王座」「主権」「支配」「権勢」はもとより天使の階級である。

こういう聖書の言葉があればこそ、アウグスティヌスは、「初めに、神は天地を創造された」（創一1）の「初め」について、次のような問いを自らに問うのである、「はじめとは時間のはじめであろうか、あるいはすべてのもののうちの最初ということであろうか、それとも神の言葉である独り子としての原基的なるもの（*principium*）においてということであろうか」と。（『創世記逐語注解』、著作集16・10）

この問いをアキナスは『神学大全』第四十六問題第三項において引継ぎ、次のように整理する。(4・70—71)

(一) 「時間の始めに」という解釈。これは「世界は常に存在したのであり、時間には始まりがない」という見解を排除するため。

(二) 「御子において」という解釈。これは「創造には二つの根源があり、その一つは諸々の善の根源、いま一つは悪の根源である」という見解を排除するため。すなわち、作動的な根源 *principium effectivum* が御父であるごとく、御子の智慧 *sapientia* が範型的な根源 *principium exemplare* であると考えたからである。詩篇一〇四篇24節には「あなたはあらゆるものを智慧においてつくり給うた」とあり、コロサイ書一章16節には「万物は彼——すなわち御子——において造られた」とあるによる。

(三) 「すべてのものに先立って」という解釈。これは一部の人による「物的なるものは霊的被造物を媒介として神によって創造された」という見解を排除するため。それゆえ実際、*淨火天*、*caelum empyreum*、*物的質料*（これが「地」という名称のもとに理解される）、*時間*、ならびに*天使的本性*、*natura angelica*、この四つは同時に創造された、と考える。

なお、訳者高田三郎・日下昭夫の注には、アルベルトウス・マグヌス『被造物大全』第一部にも「齢を同じくする四つのもの、即ち第一質料・時間・天・天使」とある、という。四つをあげる点は、アウグスティヌスが、最初に創造されたものとして、*霊的被造物の無形相的質料*、*物的被造物の無形相的質料*、この二つだけを挙げ

たのとは大きく違っている。（『神学大全』446）

『失樂園』は天と地が同時に造られたとは考えていない。

翻つてわが内村鑑三は、彼の生涯の使命として、世紀の節目の年一九〇〇年（明治33年）、以後終生にわたる伝道の機関誌『聖書之研究』を発刊する。その第一号から「創世記第一章」を連載する。（十年後、単行本『洪水以前記』としてまとめられた。）それは逐語注解ともいふべき内容である。

第一節 元始はじめに神天地つくを創造り給へり。

儒教の総ては学がく而しの一節に籠り居るとは余の曾て聞きし所なり、正当に之を解せば或は然るやも知れず、創世記は基督教聖書の最始の書にして其第一章第一節は其内に基督教の総てを含み居るやも知れず、其深淵量るべからざるの言なる事は之を一読して明らかなり。（全集8巻332ページ）

「元始はじめ」は天地の始めである。始めあれば終りあり、それゆえ神には当てはまらない。宇宙はいかに広大無辺なりとはいへ、山川草木・人間と同じく始めありて終りあり、ついには消えるもの、即ち時限的なものである。これは、それがかつて存在しなかつた時のあることを証明する言葉である。

「神」は「在いまて在いまる者、在いまざるの処なきのみならず、在いまざりし又はいま在いまざらん時のなき者」、靈にして力、義にして愛、唯一の完全者、万物の造主、人間の父にして友。天と地とその内にある総てのものは、彼に造られ

たのである。

「天地」は現象的宇宙の総て、天と地とその内にあるすべての鉱物・植物・動物、人間とその内に宿る靈魂を指す、という。

ここに靈的被造物、すなわち天使は考えられていない。矢内原も言うとおりに、この方が創世記者の意図に近い。

「創造り給へり」^{ヘブライ} 希伯來語の Bara なり、創造の意なり、既に存在せるものを取て之を改造せりとの意にあらずして、天地万物を創作せりとの意なり、工匠が木と石とを以て家を作るが如くにあらずして、美術家が粘土を取て像を作るが如くに非ずして、彼の一言を以て、彼自身の中より神は天地を造り給へりとの意なり、Bara 必しも無より有を作りしとの意にあらざるべし、そは既に神在て後の創造なれば、是れ絶対的の創始にはあらざるなり、然れども神の創造の人のそれと異なる点は人は僅かに比較的にのみ創作的なるに止て絶対的に然る能はざるに比して、神は何人にも何物にも頼ることなく、自身、彼れ自身より総てのものを作り給ふなり、世に絶対的に独立なるものは神のみにして亦絶対的創作者たり得る者は彼のみ、彼は一の宇宙を改造して他の宇宙を作り給はざりしなり、彼は亦彼れ以外に存在する者を取て彼の宇宙を作り給はざりしなり、又天地は神の造りしものなり、神自身又は神の一部分にはあらざるなり、神の作りし者なるが故に神聖なるは勿論なれども之を神なりとは云ふを得ず、神聖なることと神とを混同する者は物と物の性質とを混同する者にして如斯き者は反て神を瀆す者なり、偶像崇拜の非理は此に存す。

以上が一文 (one sentence) である。読点のみにて繋がり、最後にようやく句点がくる。この息の長い文章に、内村の意気込みを感じる。 creatio ex nihilo ではなく creatio ex deo—これがここに出てくるとは!!

第二節 地は定形なく、曠空くして、黑暗淵の面にあり、神の靈水の面を覆ひたり。

第二節に対する内村の注解も、『失樂園』第七卷 233—237 行の解説のように照応する。

‘Matter unformed and void’ VII 233

「固形躰ならざりしのみならず、液躰ならざりしのみならず、地に形として認むべきものは一として存せざりしなり」、原語にて「トーフー又ポーフー」と二語相合して、荒廢・虚無・茫漠・混沌を意味する。この連語は社会混乱の状を示すにも用いる、という。(8・336)

‘Darkness profound’ VII 233

「黒暗」、光明の不足にあらずして、其皆無の状態を云ふ、神未だ光を呼び起し給はざりし時なれば、其闇黒の状は吾人の想像以外にあり、絶対的暗黒……或は此状態を称して固形的闇黒と云ふことあり、即ち闇黒其全部全体を占めて、色なく光なく、暗き事鍊鎮の一塊、内に一罅の空虚を留めざるが如し。(8・336)

'the Abyss', VII 234

「淵」、河海又は沼沢の淵を云ふにあらず、此時未だ水の乾燥を潤すなく、河の生命を供するなし、淵は混沌の淵なり、底無き暗き空間の淵なり、其深き事限りなく、其凄き事限りなく、……曠空の淵は無限より無限に涉りて、整育秩序の希望の絶えて其中に存するなし、山あり、川あり、花あり、泉ありて吾人の心身を飲ばす此宇宙も其元始は如斯き空漠の淵なりしなり。(8・336)

on the waterly calm

His brooding wings the Spirit of God outspread,

And vital virtue infused, and vital warmth,

Throughout the fluid mass, . . . VII 234-237

「神の靈水の面を覆ひたりき」、茲に云ふ水とは水素と酸素との化合物を云ふにあらず、そは此時未だ水なる者

は造られざればなり、水は淵に對して云ふ、万物猶ほ曠空混沌の状態にありしを形容して云へるなり、恰も英語の fluid なる詞ことばの如し、必しも液躰を指すの詞にあらずして、瓦斯ガス躰にして其分子の流動する者をも亦此詞を以て示す事あり、希伯來語のマイーム（水）にも亦此意味ありと云ふ。

「覆ふ」は鶏が其翼を以て其雛を覆ふの状を示すの詞なり、即ち愛育の意にして意味深長計るべからず。（8・336—337）

‘fluid’ といひ、「翼を以て其雛を覆ふ」といひ、なんという暗合であろうか。

こゝろもび、matter (質料) ‘form (形相) と辿つてきたが、もう一語 substance (実体) にも注目しなければならない。

one first matter all,

Endued with various forms, various degrees

Of substance, and, in things that live, of life ; . . .

V 472-474

わずか三行の間に matter, form, substance といふ哲学用語が並ぶのである。これほどの形而上詩は、けだし稀であらう。

substance は『哲学事典』では、「実体」の項のもとに、「知覚せられるさまざまな性質、状態、作用の根底に

よこたわり、これを制約していると考えられるもの。実有とも訳され、あるものが「なんであるか」という問いの答えとなるそのものの本来のあり方を意味する」とある。(606ページ)

オックスフォード英語辞典では次のとおりである。

1. Essential nature, essence : esp. *Theol.*, with regard to the being of God, the divine nature or essence in respect of which the three Persons of the Trinity are one.

2. *Philos.* A being that subsists by itself; a separate or distinct thing; hence *gen.*, a thing, being.

『失楽園』三139—140の「in him (i.e. the Son) all his Father shone / Substantially express'd.」は前者の意味であり、第五巻における「substance」は後者の意味である。岩田靖夫『ギリシア思想入門』(東大出版会、180—185ページ)の表現をかりて「存在者」とするのが、OEDの定義にも近いであろう。「存在者の構成原理として形相と質料という二原理がとり出される」が、「この二原理は決して同一次元で関係し合うものではなく、むしろ層的な上下の次元で関係し合う」という。質料が形相を与えられて、実有、存在者、実体となって現われるのである。

波多野精一『西洋哲学史要』(全集—58—59)も、「質料より形相に進む」ことによって「実体は実現せらるゝ」といい、実体は個物に内在して、個物(たとえば桜)をしてそのもの(桜)たらしめている本質である、という。

最後にもう一度

one first matter all,

Endued with various forms, various degrees

Of substance, and, in things that live, of life ; . . .

V 472-474

「substance と life とが同列に並び、 substance は無生物にのみ当てはまるように見えるが、この三行は substance までを一気に読み、「生けるものには、生の（実体）」というふうに加的に読めば、論理的に矛盾はなくなる。生物はさまざまな段階の生命をもつ」という意味になる。

また、「one first matter all」も繁野天来の注では「all things being (made) of one first matter」「万物は同一原質から成ってゐるので」とあるが、注目すべきは「one から all に至る」というその語順である。「one first matter (to be all)」とも読める。一つの第一質料が万物を構成するに至る。

思い起こすのはダーウィンの『種の起源』の最後の言葉である。「思うに壮大なことは、創造主が……初め一つのものに生命を吹きこまれたということ、そして、かくも単純な発端から、きわめて美しく驚くべき無限の形が生まれ、今も発展しつづつあるということである。」

ミルトンの『失樂園』がダーウィンの『種の起源』にまさっているのは、その視野が現在にとどまらず、無限の彼方、宇宙の完成にまで及ぶことである。

追記 次に私が興味をもつのは、創世記の注解から天使の創造が消えたのはいつからか、ということである。

かつてはアウグスティヌスにしてもトマス・アキナスにしても、創世記第一章第一節（はじめに神は天と地を創造された）の天は、靈的被造物、すなわち天使と、その住む天上界を意味した。しかし内村鑑三、矢内原忠雄の注釈に、天使は登場しない。いったい、いつ「天使は消えた」のであろうか。

けだし、物的被造物は「画域的 (circumscriptive)」存在であり、靈的被造物（天使）は「限定的 (definitive)」存在である、とした区分が曖昧になった時代が問題であらう。

OED の 'circumscriptive' は、この語自体が *Obs.* としつ

1. Pertaining to, or having the attribute of, 'circumscription' (sense 2) or limitation in space.

の語義を記し、引例には、先に言及した 'definitive' の場合と同じくホブズの文章を挙げています。

1657 Hobbes, *Absurd Geom.* Wks. 1845 VII 385

Definitive or circumscriptive, and some other of your distinctions. . . . are but snares.

また 'circumscription' (sense 2) は、*くわいあん*。

2. The fact or quality of being confined to definite limits in space, as a property of matter. (Common in 16-17th c.; now *rare or Obs.*).

すなわち、一六一―一七世紀には一般的であった用語が、現代では稀語または廢語になった、というのである。

カルヴァンの注解をみると、「天と地」と言われているものは、少しあとで「水」ということばで呼ばれる混沌とした塊のことであるのは疑いをいれない。その理由は、この物質が世界全体のいわば種子だからであり、この全体世界をわれわれは一般的に区分して、このように天と地に分けるのである。」(『カルヴァン旧約聖書註解創世記1』33ページ、渡辺信夫訳、新教出版社、一九八四) という。

「天」も水ということばで呼ばれた混沌とした物質であって、けっして靈的被造物、すなわち天使、天上界のことではない。この書が完成した一六世紀なかば、一五五四年には、天も物体的被造物である、という解釈が当然のこととなったのである。